

# 野田ロータリークラブ週報

第2736回例会 (4月14日)

第2729号 2014.4.21 発行

会 長：伊 藤 義 雄

会長工/外：染 谷 栄

副 会 長：中 野 祐三郎

幹 事：栗 林 徹

副 幹 事：岡 安 誠 人

■発行責任者：小森谷 渉

■創 立：昭和31年5月 ■例会日：毎週月曜日 PM12:30~13:30

例会場 事務局 野田商工会館内5F(樺のホール)

〒278-0035 野田市中野台168-1 TEL04(7125)0061 FAX04(7125)0055

## ENGAGE ROTARY CHANGE LIVES



2013-2014年度 国際ロータリーのテーマ

### 会 長 挨 拶



伊藤 義雄 会長

昨日、那須の温泉をめぐってきました。最初に行ったのが「鹿の湯」です。「鹿の湯」は約1300年前に開湯されたといわれています。狩野三郎行広という者が山狩の際に、射損じて逃げる鹿を追って山奥に入ると鹿は傷ついた体を温泉で癒していたという。それで「鹿の湯」と名付けられたと伝えられています。松尾芭蕉が「奥の細道」の旅に立ち寄った温泉でもあり「いしの香や 夏草あかし 露あかし」の句碑が立っ

ます。41°～48°までのお湯があり、私は44°までのお湯に入ってきましたが46°以上は熱くて入れませんでした。その次に北温泉に行きました。ここもいくつもの湯場があり「天狗の湯」では混浴のお風呂でしたが、私は入らずに「河原の湯」に入ってきました。露天風呂であり河原では滝から流れてきた水が透きとおっており、新緑の木々の中でのお風呂は素晴らしかったです。又食事は雪の残った山々を見ながらの食事。充実した一日を過ごせました。たまには温泉めぐりもいいものです。

以上。

### 第2736回例会

点 鐘 伊藤 義雄 会長  
 司 会 浅野 泰泉 会員  
 ソ ン グ 我等の生業

ビジター



松戸RC会長 島村 俊光 様

御誕生祝い



尾形 知哉 会員(4月13日)  
茂木佐平治 会員(4月14日)

御結婚祝い



茂木佐平治 会員(4月15日)  
野崎 学 会員(4月20日)

ニコニコボックス

ビジター 島村 俊光 様

40年位前、野田青年会議所設立の時、よく野田に通った事をなつかしく思い出します。本日は宜しくお願ひします。

元良 信有 会員

5年間大変お世話になりました。

山下 和子 会員

小津安二郎さんがいた時代という事で、着物の事で朝日新聞(首都圏版)に出ました。

岡安 誠人 会員

昨日関宿城まつりにて野田醤油もろみ焼うどん出展致しました。晴天につき陽焼けしました。

尾形 知哉 会員

誕生祝いありがとうございます。

茂木佐平治 会員

誕生祝いありがとうございます。

茂木佐平治 会員

結婚祝いありがとうございます。

野崎 学 会員

結婚祝いありがとうございます。

早退 1名

## 幹事報告

栗林 徹 幹事



例会変更・休会のお知らせ

- ・柏西ロータリークラブ  
4月18日(金)…休会 4/16(水)第10分区親睦ゴルフ  
及び合同例会に振替
- 5月 2日(金)…休会(任意)
- ・松戸北ロータリークラブ  
4月29日(火)…定款第6条第1節により休会
- ・新入会員承認の件  
野田日石(株)取締役社長 東野久隆 氏  
推薦者 染谷 栄会員
- ・元良信有会員退会により次年度 雑誌・会報委員会  
委員長 森下芳夫会員 副委員長 小森谷 渉会員

## 委員会報告

親睦活動委員会



旅行の日程について

## 卓話

古谷 光裕 会員



### 「仏典について」

#### 一、仏説箭喻經

箭→矢のこと 喻→たとえ

パ-リ “聖典”  
パ-リ 語

#### ● 毒矢の喩え(話)

小林秀雄(1902~1983年)  
文化勲章受章・批評家・小説家  
昭和の時代、新しい批評の世界を  
開拓し、文学・音楽・美術を通して  
「人生、いかに生きるべきか」を  
鋭く問い続けた  
“私の人生観”に箭喻經“毒矢の喩え”  
広く世間に知られしす引用

世間は有常(永久に存続する)なのか  
無常(永久には存続しない)なのか  
世間は有辺(限りある)なのか  
無辺(限りない)なのか

等々について、弟子が釈尊に質問し、  
とりの釈尊の教え(毒矢の喩え)を以て  
その質問の愚いことを諭されます

#### 二、大樹心喩經

#### 三、仏界勿利天為母説法經

#### 四、パ-リ 長老偈註

#### 五、大般涅槃經

# 仏説箭喻経 実践の道 パーリ 中部七―六三

このように私は聞いた――

あるとき、世尊は、サーヴァッテイに近いジェータ林のアナータピンディカ僧院に住んでおられた。

さて、静かに独坐していた尊者の心に、つぎのような考えが生じた。

一、この宇宙の組み立てはどういうものであるか、この宇宙は永遠のものであるか、やがてなくなるものであるか、この宇宙は限りなく広いものであるか、それとも限りがあるものであるか、社会の組み立てはどういうものであるか、この社会のどういう形が理想的なものであるか。これらの問題がはつきりきまらないうちは、道を修めることはできないというならば、だれも道を修め得ないうちに死が来るであろう。

例えば、人が恐ろしい毒矢に射られたとする。親戚や友人が集まり、急いで医者呼び毒矢を抜いて、毒の手当てをしようとする。

ところがそのとき、その人が、

「しばらく矢を抜くのを待て。だれがこの矢を射つたのか、それを知りたい。男か、女か、どんな素性のものか、また弓は何であったか、大弓か小弓か、木の弓か竹の弓か、弦は何であったか、藤蔓か、筋か、矢は籐か葦か、羽根は何か、それらがすっかりわかるまで矢を抜くのは待て。」と言ったら、どうであろうか。

いうまでもなく、それらのことがわかってしまわないうちに、毒は全身に回って死んでしまうに違いない。この場合にまずしなければならぬことは、まず矢を抜き、毒が全身に回らないように手当てをすることである。

この宇宙の組み立てがどうであろうと、この社会のどういう形のものが理想的であろうとなかろうと、身に迫ってくる火は避けなくてはならない。

宇宙が永遠であろうとなかろうと、限りがあろうとなかろうと、生と老と病と死、愁い、悲しみ、苦しみ、悩みの火は、現に人の身の上におし迫っている。人はまず、この迫っているものを払いのけるために、道を修めなければならぬ。

仏の教えは、説かなければならぬことを説き、説く必要のないことを説かない。すなわち、人に、知らなければならぬことを知り、断たなければならぬものを断ち、修めなければならぬものを修め、さとらなければならぬものを

さとれと教えるのである。

だから、人はまず問題を選ばなければならない。自分にとって何が第一の問題であるか、何が自分にもっともおし迫っているものであるかを知って、自分の心をととのえることから始めなければならない。

二、また、樹木の芯を求めて林に入った者が、枝や葉を得て芯を得たように思うならば、まことに愚かなことである。ややもすると、人は、木の芯を求めめるのが目的でありながら、木の外皮や内皮、または木の肉を得て芯を得たように思う。

人の身の上に迫る生と老と病と死と、愁い、悲しみ、苦しみ、悩みを離れたいと望んで道を求める。これが芯である。

それが、わずかな尊敬と名誉とを得て満足して心がおごり、自分をほめて他をそしめるのは、枝葉を得ただけにすぎないのに芯を得たと思うようなものである。

また、自分のわずかな努力に慢心して、望んだものを得たように思い、満足して心が高ぶり、自分をほめて他をそしめるのは、木の外皮を得て芯を得たと思うようなものである。

また、自分の心がいくらか静まり安定を得たとして、それに満足して心が高ぶり、自分をほめて他をそしめるのは、木の内皮を得て芯を得たと思うようなものである。

また、いくらかものを明らかに見る力を得て、これに眼がくらんで心が高ぶり、自分をほめて他をそしめるのは、木の肉を得て芯を得たと思うようなものである。これらのものはみなすべて、気がゆるんで怠り、ふたたび苦しみを招くに至るのである。

道を求める者にとっては、尊敬と名誉と供養を受けることがその目的ではない。わずかな努力や、多少の心の安定、またわずかな見る力が目的ではない。

まず最初に、人はこの世の生と死の根本的な性質を心に留めなければならぬ。

三、世界はそれ自体の実体を持っていない。心のはからいをなくす道を得なければ



ればならない。外の形に迷いがあるのではなく、内の心が迷いを生ずるのである。

心の欲をもととして、この欲の火に焼かれて苦しみ悩み、無明をもととして、迷いの闇に包まれて、愁い悲しむ。迷いの家を作るものはこの心の他にないことを知って、道を求める人は、この心と戦って進んでゆかなければならない。

四、「わが心よ、おまえはどうして、無益な境地に進んで少しの落着きもなく、そわそわとして静かでないのか。

どうしてわたしを迷わせて、いたずらに、ものを集めさせるのか。

大地を耕そうとして、鋤がまだ大地に触れないうちにこわれてしまっただけができないように、生死の迷いの海にさまよっていたので、数知れない生命を捨てたのに、心の大地の耕されることはなかった。

心よ、おまえはわたしを王者に生まれさせたこともある。また貧しい者に生まれさせて、あちこちに食を乞い歩かせたこともある。また貧しい者に生まれさせて、あちこちに食を乞い歩かせたこともある。また貧しい者に生まれさせて、あちこちに食を乞い歩かせたこともある。また貧しい者に生まれさせて、あちこちに食を乞い歩かせたこともある。

また地獄の火で焼かせたこともある。愚かな心よ、おまえはわたしをさまざまな道に導いた。わたしはこれまで、常におまえに従ってそむくことはなかった。

しかし、いまやわたしは仏の教えを聞く身となった。もはやわたしを悩ましたり、妨げたりしないでくれ。どうかわたしが、さまざまな苦しみから離れて、速やかにさとりを得られるように努めてくれ。

心よ、おまえが、すべてのものはみな実体がなくうつり変わると知って、執着することなく、何ものもわがものと思うことがなく、貪り、瞋り、愚かさを離れさせれば、安らかになるのである。

智慧の剣をもって愛欲の蔓を断ち、利害と損得と、たたえとそしりとにわずらわされることなく、安らかな日を得ることができるのである。

心よ、おまえは、わたしを導いて道を求めることを思い立たせた。ところがいま、どうしてまたふたたび、この世の利欲と栄華にひかれて、動き回ろうとするのであるか。

形がなくて、どこまでも遠く駆けてゆく心よ。どうか、この超え難い迷いの海を渡らせてくれ、これまでわたしは、おまえの思うとおりに動いてきた。

しかし、これからは、おまえはわたしの思うとおりに動かなければならない。我らとともに仏の教えに従おう。

心よ、山も川も海も、すべてはみなうつり変わり、災いに満ちている。この世のどこに楽しみを求めることができようか。教えに従って、速やかにさとりの岸に渡ろうではないか。」

五、このように心と戦って、真に道を求める人は、常に強い覚悟をもって進むから、あざけりしる人に出会ってもそれによって心を動かすことはない。こぶしをもって打ち、石を投げつけ、剣をもって斬りかかる人があっても、そのために瞋りの心を起こすことはない。

両刃の鋸によって頭と胸とが切り放たれるとしても、心乱れてはならない。それによって心が暗くなるならば、仏の教えを守らない者である。

あざけりも来れ、そしりも来れ、こぶしも来れ、杖や剣の乱打も来れ、わが心はそのために乱れることはない。それによって、かえって仏の教えが心に満たされるであろうと、かたく覚悟しているのである。

さとりのためには、成しとげ難いことでも成しとげ、忍び難いことでもよく忍び、施し難いものでもよく施す。

日に一粒の米を食べ、燃えさかる火の中に入らなければ、必ずさとりを得るだろうという者があれば、そのとおりにすることを少しも辞さない。

しかし、施しても施したという思いを起さず、ことをなしてもなしたという思いを起さない。ただそれが賢いことであり正しいことだからするのである。

それは母親が一枚の着物を愛するわが子に与えても与えたという心を起さず

病む子を看護しても、看護したという思いを起さないと同じである

◇ 退会挨拶



元良 信有 会員

◇ 米山奨学会感謝状



宇佐見義夫 会員

野田ロータリークラブ 例会・卓話予定表

| 月 日             | 卓 話 ・ 行 事    | 月 日      | 卓 話 ・ 行 事   |
|-----------------|--------------|----------|-------------|
| 4月20日(日)~21日(月) | 親睦旅行 中華街経由房州 | 5月 5日(月) | 休日(こどもの日)   |
| 4月28日(月)        | 卓話 古谷 尊生 会員  | 5月12日(月) | 卓話 天野 克美 会員 |